原　著

第二次世界大戦後のフランスにおける柔道をめぐる対立とその展開
― 国内と国外の相互連関に着目して ―

星野　　映（早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期課程）

The Conflict and Development of Judo in Post-World War II France: Focus on the Interrelationship between situations Internal and External to France

HOSHINO Utsuru（Graduate School of Sport Sciences, Waseda University）

Abstract

The purpose of this paper is to clarify how complex relationships between judo organizations and groups in France changed after World War II. This paper focuses on the correlations between the internal situations of judo in France, and the tendencies outside of France.

The first judo federation in France was the FFJJ, which existed from 1946 to 1956. The number of Judoka rapidly increased in France after WWII because of the *Méthode Kawaishi*, an original judo method invented by Mikinosuke Kawaishi. The *Méthode Kawaishi* was adapted by the FFJJ as the official method. The centralized governance system of this method can be credited for the successful production of judo professors as well as the creation of judo clubs.

However, Shudokan Club and its professors were opposed to the FFJJ as they espoused the Kodokan Judo method by Ichiro Abe, rather than the *Méthode Kawaishi*. Abe influenced the rise of adherents of Kodokan judo in France. They were called "*tendence Kodokan*". They opposed the technical policy and the ethical characteristics of the FFJJ, and established their own federal organization in 1954. This federation showed their confrontational attitude towards the FFJJ, which resulted in the FFJJ attempting to exclude "*tendence Kodokan*" at first. This decisive conflict between the FFJJ and Kodokan spread across the country. Ultimately, both groups concluded with an agreement for their unification. A new federation, *la Fédération Française de Judo et Disciplines Assimilées* (FFJDA) was established in 1956.

In the international scene, the International Judo Federation was established in 1951, with the first World Judo Championship being held in 1956. Moreover, the movement by the IJF to include judo into the Olympic program started immediately after WWII. Thus, the period of dynamic international changes surrounding judo, and the period from the end of WWII to the foundation of FFJDA overlapped with each other.

The FFJJ actively worked to retain hegemony over international judo after WWII. In order to take the initiative within the IJF, and to facilitate the inclusion of judo in the Olympic Games, the FFJJ approached Japan despite the view against "*tendence Kodokan*" in France. The more actively the FFJJ worked with the IJF, the more the differences between the national situation and the international attitude stood out. The FFJJ attempted to integrate with "*tendence Kodokan*" by making concessions in order to resolve the conflicting situation.

Ⅰ．はじめに

フランスで初めての国内柔道統括連盟は、1946年12月につくられたフランス柔道柔術連盟Fédération Française de Judo et Jiu-Jitsu（以下、FFJJ）であった。FFJJは、1935年に渡仏した川石酒造之助の教え子たちが取り仕切り、メトード・カワイシと呼ばれる川石が考案した独自の技術体系や指導法を採用した。だが、戦後に柔道が国際化していくなかで、日本の講道館柔道の方式もフランスに流入し、それを支持したグループはメトード・カワイシを批判して、1954年に「講道館派」の連盟組織を発足させた。技術的相違を看板として大きく対立しあった両連盟であったが、1956年に協定を結んで統合し、新たなフランス柔道連盟Fédération Française de Judo et Disciplines Assimilées（以下、FFJDA）が発足した。FFJJが発足してから、国内の対立を経てFFJDAが成立するまでの10年間は、フランス柔道界にとって激動の時代であった。

これまでにもフランス国内の柔道をめぐる対立や統合については紹介されてきた[1)]。そこではフランス中に柔道が普及したことにより川石酒造之助の直接的な影響力が低下したことや、講道館柔道の技術的な優秀性にフランス人柔道家が魅了されて新たな講道館柔道支持者が増えたことなどが、対立の要因として挙げられている。あるいは、戦後に強まるフランス政府のスポーツ連盟への介入が、両連盟を統合させるに至ったと説明されてきた[2)]。フランス柔道界の歴史的な変化に関して、フランス柔道界内部にその要因が求められるのは当然であろう。

だが、1946年から1956年の10年間は、柔道をめぐる国際的な状況が急速に変化していった時代と大きく重なっていた。1948年にヨーロッパ柔道連盟Europe Judo Union（以下、EJU）が新たに発足し、これが1951年には国際柔道連盟International Judo Federation（以下、IJF）へと変わる。同年に戦後初のヨーロッパ柔道選手権大会が開催され、オリンピック種目への柔道の導入が本格的に目指されるようになるのもこの頃からであった。さらに1956年には初めての世界選手権大会が東京で開催された。こうした時代的背景があったにもかかわらず、従前のフランス柔道の歴史研究は、国際的な議論と国内柔道界の関連性を踏まえて充分に検討されていないといえる。また、柔道の国際化に関する歴史研究は、その多くが1950年前半から1964年のオリンピック東京大会以降におけるIJFやIOCの活動に重心が置かれており[3)]、第二次世界大戦直後の柔道の国際的な結びつきに関しては十分に検討されてこなかったといえる。

しかし、本稿で示すように、柔道をオリンピックの競技種目へ導入しようという企ては、1940年代後半にはヨーロッパで始まっていた。フランス柔道を取り巻く国際的な動向との関連性は、国内の対立の様相やそれぞれの両派閥の方向性を規定する要因として無視することはできないだろう。

そこで本稿では、1946年から1956年までのフランス国内の柔道をめぐる緊張関係がどのように展開していったのかを、国際的な柔道の方向性との連関を意識しながら明らかにし、いかにして両連盟の統合へ至ったのかを検討したい。また、柔道をめぐるパリと地方の関係にも着目して考察していきたい。

また、本稿では、フランス柔道柔術連盟が1950年１月から発行を開始したFFJJの公式機関誌[4)]（以下、FFJJ機関誌）や、FFJJが中心となって世界各国の柔道連盟やクラブ・道場、柔道家などについて微細に調査した国際柔道年鑑[5)]（以下、年鑑）を主な史料として用いる。この年鑑は1948年版と1950年版の２種類が存在する。また、講道館の機関誌『柔道』も併せて活用していく。

Ⅱ．フランスにおける柔道の普及

1935年10月にフランスに渡ってきた川石酒造之助は、日仏クラブを開いて柔道指導を始めた。川石は早稲田大学を卒業後にアメリカへ留学し、その後南米を経てイギリスで柔道指導を行っていた柔道家である[6)]。

一方同じ頃、1936年９月20日にパリ公共事業学校の一角でフランス柔術クラブが発足した。このクラブは柔道・柔術に関心を持ったパレスチナ系ユダヤ人の科学者モシェ・フェルデンクライスが創設したものである。クラブを訪れたのは、フレデリック・ジョリオ＝キュリーや、キュリー研究所の研究者であるポール・ボネ＝モリなど、パリの知識人や科学者、あるいは政治家などであった。川石の存在を知ったフェルデンクライスは、川石に対してフランス柔術クラブでの技術指導を依頼し、２人はフランス人に適した分かりやすい技術体系や指導法を考案し始めた。これがのちにメトード・カワイシと呼ばれる指導方式のベースとなった[7]。クラブの名称に「柔術」という名称が用いられたように、当時のフランスでは「柔術Jiu-jitsu」以上に「柔道Judo」は認知されていなかった。

フランスは第二次世界大戦でドイツ軍の侵攻を受け、1940年６月にはパリが陥落した。政府はヴィシーに逃れ、北部地域はドイツ軍に占領された。これを受けてユダヤ人のフェルデンクライスは国外退去を決断した。フランス柔術クラブの指導は川石に一任され、川石は日仏クラブを閉鎖してフランス柔術クラブの指導に専心した[8]。ドイツ軍占領下のパリでも柔道は盛んにおこなわれ、その活動がパリの日刊紙などにも紹介された[9]。

この時代に、川石はフェルデンクライスと考案していた独自の技術体系や指導法を練り上げていった。足技１番、手技２番といった具合に技を番号で呼び、日本語のわからないフランス人にも技が覚えやすいようにした。技術体系も講道館の分類よりさらに細かく分けることで、技の細かな違いを理解できるように促した。また、当時すでに講道館試合審判規程では禁止されていた首や脚の関節技も技術体系に含めて、柔道の護身術としての要素も強調した。さらに、黒帯すなわち有段者になるまでの級位を示すために、色帯を制度化した。これはイギリスですでに用いられていたシステムを川石が改良したものだが、修行日数や、技の分類に応じた技術の到達度を示す色帯を用いることによって、フランス人柔道家の黒帯取得までのモチベーションを高める役割を持っていた。こうした方法は、いつしかメトード・カワイシと呼ばれるようになり、フランスにおける柔道普及の重要素となった[10]。

また、川石は、黒帯を取得した有段者には道場を開設するよう促し、ドイツ占領下の時代にも新たな道場がつくられ始めていた。川石の弟子たちの多くも、フランス柔術クラブにならって月謝を高く設定し、メトード・カワイシで柔道指導をした[11]。先生が指導しやすく、生徒も理解しやすい体系化されたシステムによって専門の柔道指導者が続々と要請された結果、占領下のフランスにおいて最初にパリ市内、続いてパリを取り囲むセーヌ県やセーヌ・エ・オワーズ県などで柔道クラブが開設された。また、マルセイユやボルドーといった地方都市では、ドイツ占領下の時代から警察組織内に柔道指導をするクラブがつくられた[12]。

1944年７月末から1948年の末頃まで、川石は日本へ一時帰国する。川石が不在の間も弟子たちは活動を続けた。1945年８月28日に制定された各種スポーツ連盟を規定する1945年法により[13]、1946年12月にFFJJが発足し、会長にはポール・ボネ＝モリが就いた。このときにFFJJが採用した内部規約やその普及方法、技術指導法のモデルはフランス柔術クラブであった[14]。すなわち、パリのフランス柔術クラブの特質が、FFJJという全国的な連盟組織にも引き継がれており、役員の顔ぶれも科学者であったボネ＝モリ会長を筆頭に、医者や弁護士などパリのエリートを中心に構成された[15]。

FFJJ創設直後は、パリと地方の間で柔道普及の程度の差が非常に大きかった。例えば1948年版の年鑑で紹介されたフランス国内の59のクラブのうち、パリ市内だけで26のクラブが存在し、半数近くをパリ市内で占めている。また、おおよそ現在のイル＝ド＝フランス地域圏にあたるセーヌ県（パリ市を除く）とセーヌ＝エ＝オワーズ県、セーヌ＝エ＝マルヌ県といったパリ郊外には、合

わせて11のクラブが存在した。そして、残り23のクラブが全国各地に点在していた[16]。

各地方で柔道の活動実態は多様であったが[17]、FFJJ創設当初の地方の柔道場は都市部の警察や軍隊組織に設けられたものが多かった。中央集権的な管理体制を敷いてメトード・カワイシによる柔道普及を目指したFFJJは、こういった場所にパリから指導者を派遣して講習を行ったり、昇段試験を実施したりして、少しずつ柔道指導者を養成していった。また、新たなクラブを開く際には指導者はFFJJの認可が必要とされたが、その際にFFJJは「未開拓の地域に施設を創設することによって柔道柔術の普及を促進する」ようにクラブの場所を検討した[18]。こうしたFFJJの努力によってクラブ数は激増し、1950年版年鑑ではフランス全土に少なくとも173のクラブが存在したことが明らかになっている。創設年が明記されているクラブのうち、1949年に創設されたとされるクラブは43にものぼるが[19]、これは1948年11月末にフランスに復帰した川石が多くの柔道家に黒帯を追認したことで指導者が激増し、クラブの開設が相次いだためであると考えられる[20]。

1948年版年鑑と1950年版年鑑を比較すると、2年間でパリ－地方間の格差が小さくなっていることもわかる。1950年版年鑑にはフランス全体（植民地は除く）のクラブのうち、パリのクラブは33と全体のわずか19％にとどまっている。そのなかで指導者が明らかになっている29のクラブのうち、25のクラブで川石あるいは川石の直弟子が技術指導者を務めている[21]。

一方で、セーヌ県（パリを除く）やセーヌ＝エ＝オワーズ県、セーヌ＝エ＝マルヌ県といったパリ市を取り囲むおおよそ現在のイル＝ド＝フランス地域圏にあたる地域には、パリ市内のクラブを除いて44のクラブが存在しており、1948年版年鑑の数字から４倍になっていることがわかる。そのなかで、クラブの指導者が明らかな32のクラブのうち半数以上の18クラブは、川石の一番弟子世代の１人であるジャン・ド・エルトゥの教え子、すなわち川石の孫弟子が技術指導者であった。また、地方でも同じようにアンリ・ビルンボームやアンドレ・ノケ、ロジェ・ピッケマル、ギー・ペルティエ、ロベル・ソヴニエルなどの川石の直弟子世代のさらに弟子たちが、この時期のフランスで各地にクラブを開設していった。これには新たなクラブが開設される際にフランス全体への柔道の普及を考慮して開設場所を認めていたFFJJの方針が関係している[22]。新参の柔道指導者である川石の孫弟子世代は郊外や地方にクラブ開設の新たな場所を求めたのである。

1950年を最後に年鑑はつくられていないが、FFJJ総会への代表出席状況を見ると、1954年総会ではパリ市内のクラブの参加は全体の17%にとどまっている[23]。ブルッスによれば、1947年に約4,000人であったFFJJ登録人口が1952年には約18,500人、1956年には25,128人に増加しているが[24]、この増加はフランス全土に及んでいたということができる。さらに、柔道の拡がりをうけて、FFJJは運営を円滑にするため1953年からリーグと呼ばれる地域ごとのFFJJ傘下組織を次々に形成していく。リーグには主にFFJJの理事が各地域の担当というかたちで配置された[25]。つまり、パリのFFJJの意向が地方のリーグへ伝えられる仕組みになっていたのである。こうしてFFJJは、川石が作り上げた方法・制度をベースにしながら、中央集権的に技術や指導者ライセンス、段位などを管理する体制を敷いていった。

パリと地方の量的な格差は埋まっていった一方で、質的ギャップは際立っていた。例えば、1949年12月のFFJJ総会では、マルセイユ、ボルドー、トゥールーズのクラブから、「地方指導者のための全国レベルの組織」や「全国大会への地方クラブの遠征費払い戻し」などに関する発議が行われており[26]、指導者の不足や、経済的側面でのパリとの格差を感じていた地方の訴えが見られる。1951年にパリを訪れた栗原民雄は、「日仏柔道の比較」として、柔道指導法が「日本と大分異つている」ことに加え、柔道を習う人々は「中流以上」、クラブの指導者は「大抵自動車を持って堂々たる生活をしている」ことを伝えたが、こう

した柔道家像はあくまでも「パリの柔道」家なのであった[27]。

このようなパリ－地方のギャップもあり、中央集権的管理体制を厳格に推し進めるFFJJの方針には、同調しないクラブも出てきた。1951年にフランスを訪れた早川勝は、すでに「指導方針の相違から、一部に歩調の揃わない道場」があることを指摘している[28]。そうした「歩調の揃わない」傾向が最も顕著であったクラブの１つは、後述するようにフランス南部の地方都市トゥールーズに存在した。

Ⅲ．フランスにおける講道館柔道

１．講道館柔道の流入

川石が日本へ帰国している間、柔道指導の支柱を失っていたフランス人柔道家たちはイギリスの柔道に倣おうとした。イギリスでは、1918年に小泉軍治[29]が開いた武道会が中心となって活動しており、技術的にも講道館柔道の「正統をつぐ國」として評価されていた[30]。第二次世界大戦以前にヨーロッパ柔道界の中心的存在であったイギリスは、嘉納治五郎が構想していた世界的な柔道連盟の一大拠点としてドイツとともに嘉納から協力の依頼を受けていた[31]。

戦後になっても熱心な活動を続けていた武道会には、フランス人柔道家も数多く訪れていた。その１人に、川石の直弟子であったロベル・ソヴニエルがいる。ソヴニエルは、1941年12月18日にフランスで初段になり、マルセイユ警察などで柔道指導者を務めていたが、川石が日本へ一時帰国したことにより、小泉軍治へ教えを請いにロンドンへ赴いた。1946年12月にはロンドン武道会で３段に認定されている[32]。

国際的な交流は個人の単位にとどまらず、1947年12月には、ボネ＝モリFFJJ会長の提案で、初めての英仏国際親善試合がロンドンで開かれた。このときはイギリスの勝利に終わったが、ボネ＝モリは「この短い訪英が、フランス人柔道家にとって非常に勉強になった」と述べている[33]。また、ボネ＝モリは小泉にFFJJの技術指導に来てもらうよう要請していたようだが、小泉はそれを固辞している[34]。いずれにせよ、戦後の柔道をめぐるトランスナショナルな交流は、メトード・カワイシで指導されてきたフランス人が、講道館柔道に接触し始める端緒となった[35]。

また、1949年にはフランスからジャン・ボージャンとロジェ・デュシェーヌの２人が講道館を訪れた。ボージャンは、小柄ながら1943年の第１回フランス選手権大会で準優勝しており、1944年７月に川石がフランスを去る際には、フランス柔術クラブの技術指導者を川石から託されている実力者である[36]。デュシェーヌはリール地方新聞の特派員であり、リール柔道クラブの技術指導者を務める人物であった[37]。

ボージャンの文章が、『柔道』の1951年８月号で紹介されている。ボージャンは、「フランスで行われている柔道の方式は嘉納師範のそれとはかならずしも根本原理において一致していないように思われた」ため来日したと説明する。さらに、「フランスへ帰ったら講道館柔道を正しく傳えるために“フランス柔道連盟”と連絡をつけたい」と述べた。そして、「これまでのフランス柔道連盟の努力に反対するものでは決してなく、連盟の今後進むべき方向について助言を與えるため」だとしながらも、「フランス柔道連盟が正しい講道館柔道を基礎とすることに關心をもたねばならない」と考えていた[38]。1943年のフランス選手権大会決勝で大柄な体格のド・エルトゥに敗れたボージャンは、「小さい者が大きい者を制するための重要なポイント」を理解するべく講道館へ赴いたと後に語っている[39]。こうした個人的な経験も相まってFFJJもメトード・カワイシではなく「正しい講道館柔道」を採用すべきであるとボージャンは考えた。このボージャンの行動は川石の逆鱗に触れ、FFJJの会議でも批判的に取り上げられた[40]。

さらに、1950年12月にFFJJは、講道館の機関誌『柔道』の翻訳版を出版することを講道館から認可され、*Judo Kodokan*として出版することを決定した。これにより、講道館の柔道家の技術が

紹介されることになった。だが、メトード・カワイシで指導していたフランス人柔道家たちはここで紹介される技術に関して質問をされても答えられないことがあり、それは混乱につながる可能性があるとして、ド・エルトゥが出版停止を求めたこともあった[41)]。

このように、戦後の柔道をめぐる国境を越えた人的・物的交流によって、メトード・カワイシを用いて指導されていたフランスに、講道館柔道の流入がもたらされた。これらの事例は、FFJJの方向性にとって決定的な影響を及ぼすことはなかったものの、講道館柔道に対するFFJJの否定的な基本姿勢が見られる。また、こうした講道館柔道に関する情報の流入は、全国的な対立が後に先鋭化していくことを容易にしていた[42)]。

2．講道館派の台頭

FFJJが中央集権的管理体制を敷こうと試みていた一方で、南部の都市トゥールーズでは独自の動きが起こっていた。1947年につくられた「オランポ柔道クラブ」のジョルジュ・ラッセルとロベール・ラッセル、ルイ・ラッセルの３兄弟は、日本文化、とりわけ柔道の歴史に強く関心をもっていた[43)]。ジョルジュ・ラッセルが前任者から指導権を引き継ぐと、クラブの名称を日本風の「修道館」に改名した。「技術指導は嘉納治五郎師範の原理にしたがって講道館と武道会に保証される」[44)] としてメトード・カワイシは実践せず、修道館をイギリスの武道会に加盟させたラッセル兄弟は、一方でFFJJの体質を強く批判していた。1950年６月にはロベール・ラッセルがFFJJ会長のポール・ボネ＝モリに直接書簡を宛てている。書簡の中でラッセルは、柔道が人種や肌の色、階級を越える普遍的なものであるとしたうえで、「何ぴとも国をナワバリとして考えてはならないし、教育や人間文化の領域と密接な柔道に関してはとりわけそうである」と記した。そして「柔道は、それが国家的、人種的、財政的、セクト的あるいは個人的な何らかの画一的な外観に縛られてはならない」として、中央集権的かつ独占的にフランス国内の柔道を管理しようとするFFJJの体質を批判した[45)]。

ラッセル兄弟は、「真の柔道」を研究するための給費制度をつくり、1951年11月に奨学生として安部一郎を来仏させた。安部は「講道館から初めての正式なフランスへの派遣」として修道館の指導者に就いた[46)]。

パリを中心としたフランスにおける柔道の盛況を事前に聞いていた安部であったが、実際には修道館の「道場は実に小さく、五組も稽古をやれば一杯になるようなもの」であったことに非常に驚いた。安部はまた、ラッセルが次のように語っていたことを強調した。「FFJの柔道の指導は講道館柔道ではなくて川石式柔道である。吾々の要求するのはアマチュアリズムに立脚した講道館柔道である」[47)]。たしかにFFJJ 設立当初から、柔道指導によって高額な報酬を得るという川石由来の柔道指導者のあり方は、「アマチュアリズムに反するのではないか」という議論があった[48)]。ラッセルは、この点でもFFJJを批判し「アマチュアリズムに立脚した講道館柔道」を求めた。

安部は、当時の「パリを中心としてやられていた柔道」は「柔道と言えるようなもの」ではなかったと後述している。そして、自らは「崩し、作り、掛けという理論を説明しながら正しく講道館柔道の技を教え」、審判法も含めてすべて日本語で指導したという[49)]。このように安部は講道館柔道の技術的正統性を強調してメトード・カワイシを批判した。そして、このメトード・カワイシに対する技術的批判には、ラッセルが考えたFFJJの倫理的体質への批判が内包されていた。安部の指導する「講道館柔道」がFFJJ批判の象徴として機能したのである。

豊富な連絡変化技と柔軟な動きで多くのフランス人柔道家を魅了した安部のもとには、全国から柔道家が訪れ、その中には川石によって直接指導を受けていた柔道家もいた[50)]。講道館柔道を支持した柔道家は「講道館派（tendance Kodokan）」と呼ばれ、トゥールーズから全国各地に講道館派が拡大していった[51)]。FFJJ加盟ク

ラブの中からもメトード・カワイシではなく講道館柔道の技術を尊重するメンバーが現れた。

1953年１月のFFJJ総会で、メトード・カワイシと講道館柔道の技術に関する対立が表面化した。役員理事会では技術指導の方向性は従来通りメトード・カワイシを採用することで一致していたのだが、総会ではメトード・カワイシ派と講道館派の意見が激しく対立した。投票の結果、賛成多数によってメトード・カワイシを引き続き採用することが決まったが、FFJJ内部の対立構造が大きく明るみに出たかたちとなった。これに対しFFJJ会長のボネ＝モリは、講道館派がこの方針に従わなければならないことを強調し、従わない場合には、統括競技連盟であるFFJJが講道館派を放逐する権限さえ有しているということを主張した[52)]。

安部は1953年12月にフランスを去ってベルギーに渡り、ベルギー柔道連盟の技術指導部長に就いたが、それ以降もフランスへ頻繁に出張をして指導を続け、講道館派の柔道家を養成していった[53)]。トゥールーズには1953年以降つくられていたFFJJ傘下の地域リーグがFFJDA成立までつくられず、トゥールーズ警察柔道部などのFFJJ加盟クラブはあったものの、修道館が影響力を持ち続けることができた[54)]。そして、1954年10月８日に「講道館派」の柔道家が結集して講道館アマチュア連盟Union Fédérale Française d'Amateurs du Judo Kodokan（以下、UAK）を発足させた。このUAKに関して講道館では、「とやかくいわれているフランス柔道界に、最近純正な日本伝柔道の高い理想を目指し強力な一団体が発足した」[55)] と紹介された。UAKは、1955年初頭に「講道館技術アマチュア連盟Fédération Française des Amateurs des Techniques Kodokan」（以下、FATK）という講道館の「技術」を強調する名称を用いた。また、同年４月にFATKは、戦前からブルジョア・スポーツを批判してきた労働者スポーツ体操連盟Fédération Sportive et Gymnique du Travail（以下、FSGT）と協定を結んだ[56)]。このようにトゥールーズから起こったFFJJ批判は、FFJJと講道館派の全国的な対立の様相をみせた[57)]。

３．FFJJによる講道館派の排除

UAKが発足した当初、FFJJはこれを排除する動きを見せていた。1954年11月のFFJJ機関誌では、以下のような文章が掲載された。

> 連盟内の派閥のあるグループが、講道館アマチュア連盟の名のもと、柔道の実践のためにつくられたことはきっとご存知でしょう。この新たな組織は、その目的を隠しませんでした。それは、行政当局によってフランスにおける柔道の発展を唯一認められ、国際柔道連盟によって唯一承認されている、フランス柔道柔術連盟と事実上戦うことであります[58)]。

このようにUAKがFFJJに対して対決姿勢を示していることが公にされた。続いてFFJJ加盟クラブや登録者がUAKに二重登録した場合は「クラブとその全てのメンバーが、FFJの理事会の決定を待って即座に資格停止がなされる」[59)] という厳格な処分が通知された。

また、講道館派が台頭してきた1953年ごろから、FFJJは自らが授与する段位の正当性を強調するようになる。これは安部の来仏以降、安部の推薦でフランス人柔道家に講道館の段位が授与されるようになった[60)] ことに対する注意喚起であった。安部の推薦による講道館の段位に対してFFJJは、フランスの段位として認められるのはFFJJの段位のみであるということを繰り返し強調するようになった[61)]。

さらに、1955年10月には柔道指導者資格を国家免許として定める法律が成立した。これは、FFJJが柔道指導者の管理を強めるべく1948年から行政当局に働きかけていたものである。これによって、行政当局とFFJJによる審査委員会の認定なく柔道指導を行った場合には罰金が科せられることとなり[62)]、講道館派の柔道家の活動は封じられたように思われた。

Ⅳ．柔道の国際化とフランス

1．IJFの結成とFFJJ

ヨーロッパにおける柔道の連盟組織は第二次世界大戦以前にすでにつくられていた。1920年代末頃の英独対抗試合を皮切りに、ヨーロッパで柔道の国際交流が見られるようになり、1932年８月11日にドイツのアルフレッド・ローデが組織した国際的な会合で、ドイツ、イギリス、スイスがヨーロッパ柔道連盟設立の議定を結んだ。また、1934年には、戦前のヨーロッパ選手権大会がドレスデンのクリスタルパレスにて開催された[63]。同大会終了翌日の会議では、1936年のオリンピックベルリン大会においてオープン競技として柔道を加えるよう国際オリンピック委員会（以下、IOC）委員に働きかけることを決議している[64]。このように、1930年代にはヨーロッパで柔道の交流が強まっていた。しかし、各国で柔道の統括連盟が整っていたわけではなかったため、個人で柔道を教えるクラブ間の交流が中心であり、また、「柔道」クラブではなく「柔術」の名がついたクラブも多かった[65]。

当時の嘉納は柔道の世界的な連盟組織の構想を持ってイギリスの小泉やドイツの柔道家らとの関わりを強めていた[66]。そして、ヨーロッパにおける柔道の広がりを目のあたりにした嘉納は、世界的柔道組織の結成に向けた運動を具体化させようとしていた[67]。こうして、戦前のヨーロッパ柔道界は、「世界的連盟」構想をもつ嘉納との直接的な連携を取りながら活動していた。

ところが、1938年に嘉納が死去し、1939年には第二次世界大戦が勃発したことでヨーロッパの柔道交流は自然消滅していった。大戦後のドイツでは、国家社会主義ドイツ労働者党体制下の体育・スポーツにおいて国家の「強兵」に柔道が利用されたとみなされ1948年まで柔道が禁止された[68]。

ドイツが「下野」していた頃、イギリスを中心に新たな柔道連盟を結成しようという機運が高まっていた。1948年７月にイギリス柔道連盟British Judo Association（以下、BJA）が結成され、その数日後、オリンピックロンドン大会の開催に合わせて、BJA主催で国際会議が開かれた。これが第１回のEJU総会となる。イギリスのメンバーを中心に、イタリアやオーストリア、オランダから代表が参加した。これらの国々の代表者は、戦前からヨーロッパにおける柔道の交流に参加していたグループの柔道家であり、イギリスの小泉が各国の代表と折衝を重ねていた[69]。

戦前ヨーロッパの柔道交流と関わりがなかった川石やボネ＝モリを中心とするフランスは、戦前からの関係を引き継いだ他のヨーロッパ諸国とは異なり、自国を中心とした柔道の国際的な連携を模索していた。イギリスがヨーロッパ柔道の再構築を進めていた頃、FFJJ会長のボネ＝モリは、一時帰国中の川石に助言を求めて、1947年12月23日付で手紙を送った。それに対し川石が返した1948年２月28日の書簡には、GHQによって大日本武徳会が解散させられ、学校柔道が禁止されるなど、戦後日本の柔道界が混沌とした状況にあることが記されたうえで、川石自身に国際柔道連盟結成の意志があることを伝えた。そして、そうした国際的な柔道の連盟を結成するためには、「もはや日本の下にではなく」、FFJJが「それ自身の強い影響力をもたなければ」ならないとし、戦後の国際柔道においてはフランスがイニシアティブを握っていくべきであると川石はFFJJに助言した[70]。

ボネ＝モリは、小泉に対してフランス、イギリス、スイス、チェコスロバキアで国際会議を開催することを提案していた。しかし、この提案に対して小泉は、戦後に台頭してきたFFJJが国際的な発言力を強めるための政治的な動きであると判断し、戦前からのヨーロッパ柔道のグループで第１回EJU総会を開催する旨を返答した。そのため第１回EJU総会では、FFJJは事務局長のジル・ド・ジャルミを「オブザーバー」として参加させるにとどまった[71]。

こうして1948年７月28日に再びEJUが正式に成立した。このとき採択された規約はほとんどが戦前のEJU規約に基づくものであり、メンバー

だけでなく制度面でも戦前のヨーロッパ柔道の枠組みを継承したものであった。規約ではEJUの目的として、「均一の段位規定を設けること」や「国際的な試合条件やルールを制定すること」、「柔道の技術的な知識や研究の発展のための方法や手段を組織し拡大すること」などが掲げられた。1949年の第2回総会でも、FFJJはオブザーバーという立場で出席した。総会では、加盟国間の国際試合においては講道館試合審判規程を適用するという決定がなされた[72]。講道館の「正統をつぐ」イギリスが中心となっていたため、この決定は必然であった。

FFJJがEJUに加盟するのは1950年にイタリア・ベニスで開催された総会においてである。FFJJからは新たに事務局長となったジャン＝レーヌ・マルセランが参加した。この総会で、EJU会長のイタリア人アルド・トルチは、「フランスがいなければ、ヨーロッパでは柔道に関して何もできない」ということを強調した。そして、マルセランは、FFJJの加盟によって「大きな国際大会を創設することが可能になり」、また、「世界的な連盟への最初の一歩」として「ヨーロッパ選手権や世界選手権を見ることになるのはおそらくそう遠くない」と誇った[73]。

1950年12月のFFJJ機関誌には、フランスがEJUに加盟したことの重要性が次のように語られている。

> すでにフランスの柔道が多くのヨーロッパの国々のモデルとして機能するであろうことは明確になっている。そのヨーロッパの国々は、より一層価値が認められているメトード・カワイシを教える指導者だけでなく、その国々の連盟を組織するためのアドバイスも求めている。[…] あらゆる我々の技術が日本に由来するとしても、我々の連盟の構造に関しては、フランスの問題解決法であるし、奇妙なパラドクスによって、フランスの柔道は、日本の柔道以上に優れた均質性と統一性を常に持っているのである。このことは、国際的な観点から、日本とともに国際的な連盟を形成するのに有用な役割を果たすために非常に好都合な立場を我々に与えてくれるのである[74]。

組織的まとまりという点では日本の柔道界よりもフランスのほうが優れていることをFFJJは強調した。だが、川石が助言したような、「日本から自立してFFJJが率先して国際柔道連盟を組織する」という方針から、このときには「日本との結びつきを強めることによって、国際的な連盟を形成する」という方針へと転換していたことがわかる。EJUへの加盟はその前段階となっていた。これ以後、FFJJはEJUの枠組みを活用しつつ日本へと接近していくようになる。

このEJUは、アルゼンチンからの加盟申請を受けて、1951年8月にロンドンで開かれた第4回の総会で形式上解散し、新たにIJFとなった。この総会には講道館館長兼全日本柔道連盟（以下、全柔連）会長の嘉納履正の参加が求められていたが、結局嘉納履正からは書簡が送られるにとどまり、出席は見送られた[75]。こうして、IJFは日本不在のなかで結成された。IJF会長にはイタリアのトルチが就任したのだが、FFJJ会長のボネ＝モリはこの人選に反対した。FFJJはIJFの会長には全柔連会長の嘉納履正が就くべきであると提案したのである[76]。ボネ＝モリの提案した嘉納履正のIJF会長就任は、1952年のIJF臨時総会で全柔連の加盟とともに正式決定した。

また、1952年8月の総会で、IJFは傘下に大陸連盟を設置することを決定した。これにより大陸連盟としてEJUが再組織化された。このときFFJJ代表のボネ＝モリは、「ヨーロッパにおけるフランスの重要性は、東洋における日本の重要性と並ぶものである」として、フランスの代表が会長になるべきという意見を出した。結局は、トルチがそのままEJUの会長に就き、ボネ＝モリは副会長にとどまった[77]。ここからも国際舞台における覇権へのFFJJの意欲がうかがえる。

2．FFJJの「対日外交」

1951年12月、パリで戦後初のヨーロッパ選手権大会が開催された。大会の開催が決定すると、さらにFFJJは嘉納履正や日本の柔道家を招待することを決定した。選手権大会開催直前のFFJJ機関誌には、来仏する日本人柔道家が写真付きで紹介されている[78]。大会は、12月５日から２日間行われ、個人戦・団体戦共にフランスが圧勝して大盛況を収めた。この大会の後、12月６日にIJF臨時総会が開催され、ヨーロッパ諸国に加え、日本からは嘉納履正と田代重徳講道館国際部長がオブザーバーとして参加した。ここで日本のIJF加盟が要望され、日本が加盟した暁には嘉納履正をIJF会長に推挙することになり、翌年に全柔連のIJF加盟と嘉納履正の会長就任が決定したのである。また、事務手続きや各国連盟との連絡など実質的な運営業務を担う事務総長には、田代重徳が務めることになった。だが、1954年に田代は事務総長の役職を辞し、後任として嘉納履正から指名を受けたポール・ボネ＝モリが役職を引き継いだ[79]。

この前年の1953年５月、ボネ＝モリは日本を訪れていた。渡航の手続き上便宜が図りやすいとして、講道館の正賓として迎え入れるよう要請し、講道館もそれを承諾した。ボネ＝モリは全日本選手権大会を見学し、FFJJ代表として優勝杯の寄贈をしているのだが、その際の挨拶では、フランスが「講道館及び日本柔道連盟と密接なる関係を維持」していくことを望んでいると表明した[80]。フランス国内ではFFJJと講道館派の対立が深まっていた一方で、この頃の対日柔道外交では、ボネ＝モリは「親講道館」の姿勢を見せていたのである。また、この来日時に、ボネ＝モリは事務総長の役職を自らに譲るよう要求していた[81]。各国柔道連盟の情報が最も入ってきやすい役職をボネ＝モリは望んでいたのである。ボネ＝モリの訪日は、フランスがIJFにおいて主導的存在になっていくうえでの好機となった。

ところが、国内でUAKが結成された直後からFFJJの「対日」姿勢が変化してくる。1954年10月のFFJJ機関誌上では、嘉納履正らが作成し各国連盟に送付した新たなIJF規約草案に対して、FFJJからの２つの異論が示された。

１つ目は、規約草案の中で「講道館柔道」という名称が用いられていることである。「私的な」組織であり、「財政的にも自立した」組織である講道館の名称を用いるのは不適切であるとして、「講道館柔道」の代わりに「嘉納治五郎の柔道」という表現をFFJJは提案した。２つ目の異論は、事務総長と財務総長の役割が矮小化されていることである。草案では事務総長と財務総長は「『会長の命令』を実行するにすぎない」とし、嘉納履正が就いた会長職の独裁を懸念しての異論だということを説明している。そして、そうなった場合には、１つ目の異論と関連して「私的な組織である講道館が、国際的な組織であるIJFを完全に支配することを意味するのである」として、フランスは受け入れられないし、そのような目的で会長職に嘉納履正を推したのではないと主張した。さらにこの文章は講道館の批判へと続き、IJFに関しても「講道館の影響から未だ充分に解放されることができていない」と強調した[82]。UAKが結成されたことにより、それまで日本への接近を図っていたFFJJが、国際的な議題に関しても講道館に対して批判的になっていく変化をここでは見ることができる。

一方で、国際的には1955年10月にEJU技術委員会のメンバーが選挙によって選出され、川石の他に、イギリスの小泉、ベルギーの安部、さらにオーストリアと西ドイツの代表が選出された。つまり、川石と安部は同じ委員会に属することになったのである 。安部は近年のインタビューで、EJU主催の講習会や各国の講習会では「柔道の用語を日本語に統一することに精力を注ぎました」と述べている。「当時のヨーロッパ柔道界は、今と違って日本に学ぼうという姿勢があった」ため、「比較的スムーズに受け入れられた」という[83]。ヨーロッパを中心にして形成された国際柔道界において、技術に関しては日本が基準となっていた。FFJJは、国内では講道館方式を支

持するグループと対立し、それを排除しようとしていた一方で、国際的には講道館方式を尊重しなければならないという「ねじれ」状態に陥っていた。

3．FFJJと国際大会

FFJJは大会の組織も積極的に努め、国際スポーツとしての柔道を推し進めた。1947年に始まるイギリスとの対抗試合を皮切りに、1950年にはオランダと、1951年にはオーストリアとの対抗試合をFFJJが実行した。FFJJが主管となっていたこれらの国際試合では、川石がつくった試合規程が用いられていた。つまり、メトード・カワイシの技術体系に含まれる首や脚の関節技など、日本の試合規程では禁止されている技の使用が認められたのである。1949年のEJU総会で、加盟国間の国際試合においては講道館試合審判規程を適用することが決定していたものの、二国間の親善試合では申し合わせで柔軟にルールの適用がなされていたようである[84]。

ところが、1951年12月にパリで開催されたヨーロッパ柔道選手権では、講道館柔道試合審判規程が採用された。国際競技連盟が、それに加盟する各国競技連盟を規定するという構図が、柔道においてもはっきりと見られるようになったのである。すなわち、ヨーロッパ選手権大会開催の主管を担っていたFFJJも、EJUが採用する講道館柔道試合審判規程の適用をせざるをえなかった。FFJJは、嘉納履正から送られてきた講道館試合規程の英語版を仏訳して発行した[85]。

ヨーロッパ規模の選手権大会が実現すると、FFJJはさらに世界的な選手権大会の開催を目指すようになった。1953年の末頃には、南北アメリカの柔道チームがヨーロッパ遠征を行った際に、ボネ＝モリとアルゼンチン柔道連盟のカルロス・チャバスとの間で、世界選手権大会の開催が話題に挙がっている[86]。このときはアルゼンチン柔道連盟が1954年11月にブエノスアイレスで世界団体選手権を開催することを提案し、FFJJも全柔連の嘉納履正も好意的な返答をしていた[87]。結局、大会開催に必要な巨額の出費や時間的な制約から実現は不可能になったが、世界大会の開催が日本の外で計画されるほどに柔道は国際スポーツとしての歩を進めていた。

また、フランスとアルゼンチンの間で行われたこの議論の内容は、いずれもボネ＝モリを通して日本へと伝えられていた。日本は、EJUやIJUで要職に就くボネ＝モリから届いた意見を、「欧州柔道連盟の意向を反映して居るものと見て差支えない」と信頼しきっていた[88]。

アルゼンチンによる開催が不可能と判断されるや、今度はFFJJが世界選手権大会開催の意向を示した。一方の日本柔道界としても、「日本に起源を発する柔道の第一回世界選手権大会は、是非日本で開催したいという念願」があった[89]。そこで、1955年３月22日にパリで開かれたEJUの会議において、その翌年に日本主催のもと世界柔道選手権大会を挙行することを日本側に要請することを決定したのである。これにより、1956年の第１回世界柔道選手権大会は東京で開催されることが決定する。FFJJもこれに全面的に賛成したが、「船室旅費、滞在費は開催地で持つ」ことを条件として提示した[90]。こうして第１回世界選手権大会は、FFJJやEJUが日本に対して東京での開催を促すようなかたちで行われることになった。この世界選手権大会開催の決定を機に、世界各国で柔道連盟の組織化が進み、IJF加盟国が日本のみであったアジアからも、カンボジアやインドネシア、フィリピン、タイなどが加盟申請することになる[91]。

4．IJFとFFJJのオリンピックへ向けた活動

ドイツ、イギリスを中心とした戦前のヨーロッパ柔道界でもオリンピック大会への柔道競技導入は意識されていたが、それは戦後のヨーロッパ柔道界にも引き継がれていた。1948年版年鑑には、イギリスの小泉軍治が「柔道とオリンピック」と題した文章を寄稿した。ここで小泉は、オリンピック大会への柔道導入実現に関して生前の嘉納治五郎は「参加する他の国々の柔道に対する理解

度」しだいであると話していたことを述懐しつつ、戦後に柔道が大きく普及した現状を踏まえて、オリンピック競技種目への導入に向けた運動を展開することを打ち出している[92]。」文章のあとには、国際大会の情報募集を呼びかけており、この頃の国際対抗試合や地域選手権大会、世界大会の開催は、オリンピック大会への柔道導入実現に向けて敷かれた布石としてとらえることができる。

IJFが結成されるとオリンピックへ向けてさらに本格的な運動が始まり、1951年９月15日にIJFはIOCによって柔道の国際競技連盟として承認された[93]。1951年９月に発行されたFFJJ機関誌の「世界の柔道」という記事では、IJFの結成を「疑いなくわれわれのスポーツ〔柔道〕をオリンピック1956年大会に入れることを可能にするもの」と説明している[94]。さしあたりは1956年のメルボルン大会での導入が目指されたのである。

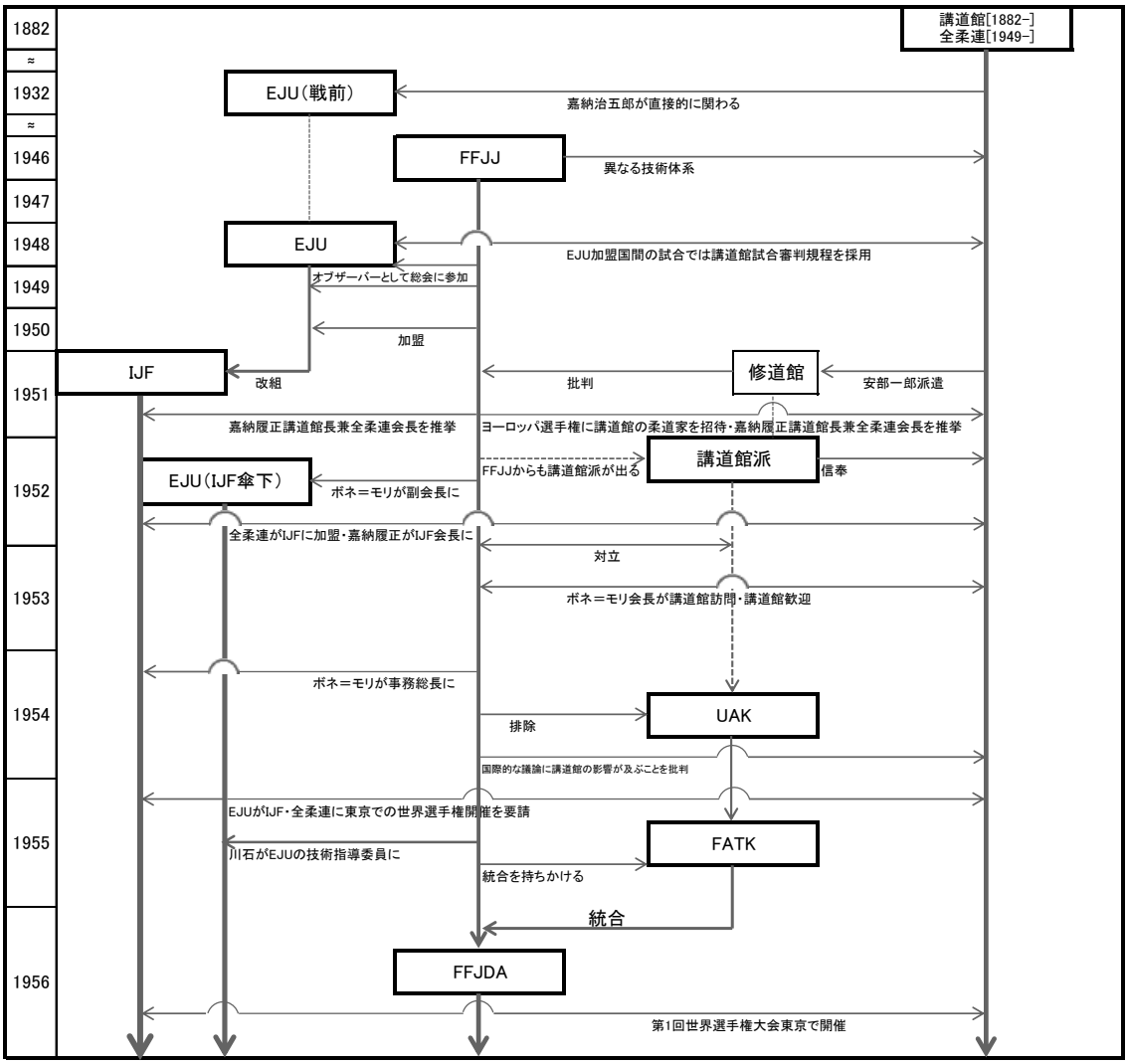
当然FFJJも、柔道をオリンピック大会の競技種目へと導入すべく各所に働きかけを行っていた。1950年版年鑑でボネ＝モリは、「フランスの柔道は、その発展によって、日本とともに国際柔道連盟を形成することに貢献しなければならない」とし、「そのことはオリンピック大会に柔道が導入される序曲となるのである」と語っている[95]。このようにFFJJにはEJU加盟以前から柔道をオリンピック種目にするという目標があり、また、そのためには日本と結びついてIJFを結成することがオリンピックへの第一歩であるという考えがあった。

1953年春のボネ＝モリの訪日も、こうした文脈に位置づけることができる。1949年のオリンピック大会への参加復帰が明らかとなった日本では、「スポーツ界の国際復帰」が本格化していた。1952年に東京都議会で1960年夏季オリンピック大会の招致が決議され、翌年３月には国会で可決された[96]。その直後に来日したボネ＝モリは、講道館への訪問や全日本選手権大会の見物に加えて、文部事務次官への挨拶にも赴いていた。さらに、日本体育協会会長でありIOC委員であった東龍太郎が主催したボネ＝モリ歓迎の晩さん会では、東会長だけでなく日本の各種スポーツ団体の代表者との歓談も行っていた[97]。オリンピック大会の競技種目に関しては、導入するスポーツを決定する裁量が大会組織委員会にも分配されているが、「日本の政治家やスポーツ関係者だけでなく、日本、ヨーロッパ、アメリカからのスポーツマンもオリンピック柔道を支持した」[98] ように、東京でオリンピック大会が開催されることはIJFにとっての念願でもあったのである。

こうして1953年のIOCメキシコ総会で初めて柔道が議題として挙げられたが、競技種目への加入に関しては委員会の正式議題としてではなく、「非公式に口添えしてもらう」のみであった[99]。この頃のIOCの方針としては、大会の競技種目と参加人員が多く、限られた日数で行われるプログラムの編成が困難であったことから、競技種目を削減する方向にあった。結局、柔道がオリンピック種目に導入されるかどうかの議論は1954年のアテネ総会まで延期された。アテネ総会では東が、柔道が世界的に普及していることなどからオリンピック種目としての資格は十分であると意見を述べたものの、1956年メルボルン大会において新しいスポーツは導入しないことを決定した[100]。さらに、1955年パリ総会でも柔道の導入については議論されたが、否決された[101]。その後、柔道の導入が決定するのは1960年のことである。その間、FFJJはオリンピックに関わる働きかけを積極的に行っていた。柔道がオリンピックスポーツへと向かっていくなかで、フランスはその国際的な存在感を強めていったのである。

だが、FFJJが柔道のオリンピック競技種目導入実現に積極的になればなるほど、FFJJはIJFや日本の体育・スポーツ界、日本柔道界との関係性を緊密化させることになり、国内で日本の講道館柔道を支持するUAKまたは、その後のFATKと対立しているという矛盾はさらに際立ってくる。この矛盾への対応として、FFJJはFATKとの統合を試み始めた。

表 1. FFJDA成立までの諸組織の成立と関係



Ⅴ．新たなフランス柔道連盟の発足

1954年のUAK発足当初はその排除を試みていたFFJJであったが、1955年以降、国内と国外の「ねじれ」状態を解消すべく、一転してFATKとの統合路線をあわただしく模索し始める。表１では統合までの諸組織の関係を示した。1955年６月に、それまで「無視しあっていた」FFJJとFATKの両連盟による初の会合が、FFJJ関係者の提案により行われた。ここでは、国民教育省のスポーツ担当部局であるスポーツ総局の同意を得られるような規約を両代表で作成するための会合が設けられた。さらに同年９月の初頭にも会合が行われたが、これらの会合で、統合の意見がまとまることはなかった[102)]。

1956年２月29日、さらにFFJJ理事会の提案によりフランスレーシングクラブで会合が行われ、統合のための合意協定が両連盟の代表によって結ばれた。ここにはFFJJとFATKの幹部らに加え、スポーツ総局と国民教育省の代表者が同席した。スポーツ総局代表は、「各種スポーツには、スポーツ総局によって定められ、承認された、

ただ一つのアマチュアの連盟のみしか存在しえない」旨を述べたうえで、「フランス柔道柔術連盟は、いずれにせよ、その承認を得て、それを保持している」ことを明示した。一方で、「〔FATKには〕いかなる場合にも、ましてや、代わりに管理運営する指導権と責任をもつ権限を〔FFJJ〕連盟に与えた国民教育省、青年スポーツ省からはなおさらその承認を得ることをのぞめない」としてFFJJのフランスにおける柔道の統括連盟としての正統性を強調した[103)]。

だが、同会合で結ばれた両連盟の合意協定はFFJJにとって好ましくないといえる内容になった。統合の時点で、FFJJに加盟するクラブは約800、登録人口は約25,000人であったのに対し、FATKはクラブ数150、登録者はおよそ5,000から6,000人であった。それにもかかわらず、新たな連盟の会長こそFFJJのメンバーから選出することになったものの、32人から構成される理事会メンバーは、半数の16人ずつが、それぞれの連盟から選出されることになった。さらに、技術委員会もFFJJとFATKの両連盟出身者で構成されることになった。すなわちメトード・カワイシを信奉してきた柔道家と講道館柔道を支持してきた柔道家が同じ委員会で共存していくという協定である。同協定は各クラブに送付され、4月22日に開かれたFFJJ臨時総会にかけられた。同総会にはFATKの副会長と事務局長も出席した。協定は賛成が370票、反対が42票で採択され、新たにFFJDAが誕生した。反対の主な理由は、FFJJとFATKの登録人口の差にもかかわらず、両連盟から同数の代表の役員で理事会が構成されることになるという決定に関するものであった。総会に向けてFFJJが事前に各リーグに送付していた文章には、この協定について、FFJJの「大きな譲歩」、あるいは「明らかな断念」と表現したものの、それはFATKの信頼を得るためであったと説明している[104)]。FFJJの「断念」とFATKに対する「譲歩」によって、FFJJとFATKの統合は実現した。このとき初の世界柔道選手権大会の開催が2週間後に迫っていた。FFJDA成立後、それまで傘下リーグのなかったトゥールーズ周辺でも、新たにFFJDA傘下のラングドックリーグがつくられ、以降はトゥールーズもFFJDAの強い影響下に置かれていくことになる[105)]。

Ⅵ. おわりに

以上みてきたように、第二次世界大戦後のフランスにおける柔道をめぐる複雑な緊張関係は、フランス国内のナショナルな現象でありながら、国際的な柔道の動向やローカルな状況と連関して展開してきた。

メトード・カワイシを実践してきたフランスに、戦後の柔道の国際化で講道館柔道が流入していった。また、安部一郎の来仏とトゥールーズからのFFJJ批判が相俟って「講道館派」が台頭していく状況が生まれた。これに対し警告を出したFFJJであったが、さらに「講道館派」がUAKを結成し、また、FFJJが資格停止処分の提示やFFJJ機関誌内での批判を繰り返すなど、柔道をめぐる二派の対立は決定的となった。

国際的には、戦前からのヨーロッパにおける柔道柔術の交流がイギリスを中心になって再構築されていた一方で、FFJJは異なった方向から自らが中心となって形成する国際的な柔道連盟を模索していた。結局はIJFの結成において日本と接近することによって国際柔道界の主導権を握ろうとしたFFJJは、国内の講道館派との対立が起こっていた一方で、外交面では当初は「親日」の姿勢を見せた。この「親日」姿勢も国内の対立が激化したことで微妙に様変わりしていった。FFJJは、オリンピック大会への柔道導入に向けたIJFの活動に邁進しながら、日本と並ぶ国際柔道界の中心的存在となった。だが、それに伴って、一方では国内の「講道館派」との対立が起きているという矛盾が生じてくる。この「ねじれ」を解消すべく、FFJJは自ら統合の方法を模索した。こうして、好ましくないと思われる統合協定にもFFJJは合意することになり、新たな連盟であるFFJDAが発足した。国内柔道界と国際柔道界の矛盾に対処するため、FFJJは「譲歩」せざるを

得なかったのである。

1950年代以降は、フランス国内のパリと地方の関係だけでなく、フランス本土とフランス海外植民地の関係も大きく展開していく。こうしたその他の諸地域間の柔道をめぐる相互連関については今後の課題としたい。

注および引用・参考文献

1）例えば、Michel Brousse, *Les racines du judo français*, Presses Universitaires de Bordeaux, 2005. Samuel Julhe et Jean-Paul Clément, « L'implantation locale des arts martiaux japonais en France. Étude comparée des cas strasbourgeois et toulousain（1945-1964）», *Stadion. International Journal of the History of Sport*, 2007(1) No.33, pp. 151-169、Samuel Julhe, « Les pratiques martiales japonaises en France », *Actes de la recherche en sciences sociales* 2009(4), 2009, pp.92-111.、高木勇夫「パリの巴投げ」坂上康博編著『海を渡った柔術と柔道』青弓社、2010年などがある。

2）Brousse, *Ibid.*, pp.302-308.

3）Michel Brousse and David Matsumoto, *Judo A Sport And A Way Of Life*, Interational Judo Federation, USA, 1999. Andreas Niehaus, "'If you want to cry, cry on the green mats of Kodokan' : Expressions of Japanese cultural and movement to include Judo into the Olympic programme", *The International Journal of the History of Sport*,2006, Vol.23, No.7, pp.1173-1192など。また、Richard Bowen, *100 Years of Judo in Great Britain, Vol.2*, IndePenPress, 2011は、主にイギリスの活動に重心が置かれてはいるものの、戦後直後の国際間の柔道をめぐる議論に関して詳しく書かれている。

4）*Judo, Bulletin Officiel de la Fédération Français de Judo et Jiu-Jitsu, Collège des Ceintures Noires*（以下、*Judo*）.

5）*Judo International* の史料的価値についてはBrousseが詳細に検討している。Brousse, *op.cit.*, pp.51-68.

6）川石酒造之助（1899-1969）は1899年に兵庫県姫路市の醸造家の五男として生まれた。1914年、姫路中学に入学し柔道を始め、1918年に大日本武徳会の柔道初段を取得。1919年に早稲田大学予科へ入学後に、講道館に入門。1926年にアメリカへ渡り、南米、イギリスを経て1935年に渡仏。
真柄浩「川石酒造之助について―生いたちと欧州柔道界に与えた影響―」『順天堂大学保健体育紀要』第20号、28-36頁、1977年。
Brousse, *op.cit.*, p.208.
白井智子「フランス柔道の創始者・川石酒造之助―科学的手法と日仏の人脈―」『仏蘭西学研究』第30号、2009年。

7）Brousse, *op.cit.*, p.207

8）Claude Thibault, *Un Million de Judokas, Histoire du Judo Français*, Éditions Albin Michel, 1966, p.33.

9）*Paris-soir*, 15 Avril 1942, p.1, pp.4-5, *Le Matin*, 2 Decembre 1942などでは特に川石を取り上げて柔道について詳細に紹介されている。

10）Michel Brousse et Jean-Paul Clément, « Le Judo en France, Implantation et evolution de la méthode japonaise », Thierry Terret（dir.）, *Histoire du Sports, Espaces et Temps du Sports*, L'Harmattan, 1996, pp.147-148.

11）Brousse, *op.cit.*, p.278. pp.285-289.

12）*Judo International*, 1950, p.236.

13）齋藤健司『フランススポーツ基本法の制定［上巻］』成文堂、2007年、p.204.

14）Brousse, *op.cit.*, pp.262-263. 戦後に川石がフランスに復帰すると、「フランス柔術クラ

ブ」は「フランス柔道クラブ」に名前が変えられた。

15）早川勝「欧米漫遊記」『柔道』1951年11月号、19頁。例えば、ボネ＝モリが会長の時代に副会長を務めたジャン＝ポール・ガレは医師、同じく副会長であったアンドレ・メルシエはパリの有力な実業家であった。

16）« Salles d'Etude Françaises », *Judo International*, 1948, pp.85-122.から算出。

17）フランス各地の柔道普及の多様性については、先述したJulhe et Clémentの « L' implantation locale des arts martiaux japonais en France. Étude comparée des cas strasbourgeois et toulousain （1945-1964） »や、Frédéric Vial et François Ruffinの*Histoire du Judo en Franche-Comté*, La Belle Etoile, 2000などに詳しい。

18）« Règlement Intérieur de la Fédération Française de Judo & Jiu-jitsu », *Judo International*, 1948, p.126.

19）« Club de France », *Judo International*, 1950, p.229-287.から算出。

20）Claude Thibault, *Un Million de Judokas, Histoire du Judo Français*, Éditions Albin Michel, 1966, pp.57-62.

21）« Club de France », *Judo International*, 1950, p.229-287.

22）« Règlement Intérieur de la Fédération Française de Judo & Jiu-jitsu », *Judo International*, 1948, p.126.

23）*Judo*, Décembre 1954-Janvier 1955, No.45, p.7.

24）Brousse, *op.cit.*, p.273.

25）*Judo*, Mars 1953, No.29. p.27. *Judo*, Février 1954, No.38, p.24.

26）*Judo*, Février 1950, No.2, p.11.

27）栗原民雄「日佛柔道の比較 パリーにて」『スポーツタイムス』1952年2月15日号、1頁。

28）早川勝「欧州漫遊記」『柔道』1951年11月号、19頁。

29）小泉軍治（1855-1965）は1885年茨城県に生まれ、天神真楊流柔術を学んだ。1906年にイギリスへ渡り、そこで柔術指導を始める。1918年ロンドンに武道会を設立し、1920年嘉納治五郎が欧州教育事情視察で訪れた際に講道館２段を授与される。その後はイギリスおよびヨーロッパ柔道界の中心的な存在として活動するも、1965年に自死した。村田直樹『柔道の国際化』日本武道館、2011年、127-175頁。Richard Bowen, *100 Years of Judo in Great Britain, Vol.1-2*, Indepenpress, 2011.

30）『柔道』1952年3月号、8頁。

31）嘉納治五郎は欧州視察の際にパリも訪れていたが、その講演活動やデモンストレーションによって柔道が定着するまでには至らなかった。また、1924年から1933年まで石黒敬七が、パリを拠点にルーマニアやエジプトにまで柔道デモンストレーションを行っていたものの、見世物としての活動が中心で、柔道が普及するには至らなかったと評価されている。Brousse, *op.cit.*, pp193-195.

32）« Robert Sauvenière », Claude Thibault, *Entretiens avec Les Pionniers du Judo Français*, Edition Résidence, 2000, pp.222-223.

33）*Judo International*, 1948, p.103.

34）Bowen, *op.cit.*, p.366.

35）« Robert Sauvenière », Claude Thibault, *op.cit.*, p.227.

36）« Jean Beaujean », Claude Thibault, *op.cit.*, pp.12-13.

37）*Judo International*, 1948, p.88.

38）ジャン・ボージャン「帰国に際して」『柔道』1951年8月号、8-9頁。

39）« Jean Beaujean », Claude Thibault, *op.cit.*, p.13.

40）*Judo*, Décembre 1951, No.20, p.32.

41）Brousse, *op.cit.*, p.302.

42）他にも、1951年に安部より前にフランスを訪れた望月稔なども講道館柔道の技術を紹介している。« Guy Pelletier », Claude Thibault, *op.cit.*, p.171.
43）Julhe et Clément, *op.cit.*, p.159.
44）*Judo International*, 1950., p.279.,
45）“Courrier adressé par Robert Lassere à la FFJJJ, Juin 1950”, Michel Brousse et Jean-Paul Clément, *op.cit.*, p.153.
46）Jean Pujol, *le Judo du Kodokan*, Lyon, 1953.
47）安部一郎「欧州柔道行脚」『柔道』1956年7月号、44頁。
48）*Judo*, Janvier 1950, No.1, p.13.
49）「講道館柔道十段物語　第13回『欧州柔道発展に貢献』安部一郎」『柔道』2012年4月号、14-15頁。
50）Brousse, *op.cit.*, p.303.
51）Julhe et Clément, *op.cit.*, pp.159-161.
52）*Judo*, Avril 1953, No.30, p.30,
53）安部一郎「欧州柔道界行脚」『柔道』1956年7月号、46頁。
54）Julhe et Clément, *op.cit.*, p.161.
55）川村貞三「欧州の柔道界」『柔道』1955年10月号、47頁。
56）*Judo*, Mai 1956, No.55, pp.4-6.
57）両派の統合が決定した直後の*Judo*ではFATKの加盟クラブリストが掲載されている。*Judo*, Mai 1956, No.55, p.7
58）*Judo*, Novembre 1954, No.44, p.30.
59）*Ibid.*, p.30.
60）『柔道』1952年3月号、10頁。
61）*Judo*, Novembre 1954, No.44, pp.3-4. *Judo*, Décembre 1954-Janvier 1955, No.45, p.8.
62）齋藤、前掲書、234頁。
63）Brousse and Matsumoto, *op.cit.*, pp.99-100.
64）「オリムピックに柔道を加えよ　欧州柔道連盟が運動」『読売新聞』1934年12月28日朝刊、5頁。
65）こうした戦前のヨーロッパにおける柔道や柔術の隆盛は、世紀転換期に数多くの柔術家が日本から海外に渡ったことと、嘉納治五郎のヨーロッパ渡航の際の柔道宣伝とが結びついたことによるものであった。Brousse and Matsumoto, *op.cit.*, p.100.
66）先述したBowenの著作で詳しく紹介されている。
67）村田、前掲書、296-307頁。
68）市場俊之「ドイツの柔術・柔道」坂上康博編著『海を渡った柔術と柔道―日本武道のダイナミズム』青弓社、2010年、156 - 159頁。
69）Bowen, *op.cit.*,p.366.
70）Brousse, *op.cit.*, pp.284-285.
71）Bowen, *op.cit.*, p.388.
72）*Ibid.*, p.395-398.
73）*Judo*, Novembre 1950, No.9, pp.11-12.
74）*Judo*, Décembre 1950, No.10, pp.9-10.
75）嘉納履正『伸び行く柔道―戦後八年の歩み』桐蔭堂、1953年、65-66頁。
76）田代重徳「世界柔道の現状」『柔道』1952年12月号、61頁、Paul Bonét-Maury et Henri Courtine, *Le Judo*, Presses Universitaires de France, 1971. p.118.
77）Bowen, *op.cit.* p.401.
78）*Judo*, Octobre 1951, No.18, pp.5-7.
79）*Judo*, Mars 1954, No.39, p.32.
80）『柔道』1953年6月号、47頁。
81）*Judo*, Mars 1954, No.39, p.32.
82）*Judo*, Novembre 1954, No 44, pp.3-4.結局、1956年に決定したIJF新規約では、「故嘉納治五郎師範の定め、かつ東京の講道館に於て行われているもの（以下単に柔道という）」という表現になった（『柔道』1956年7月号、7頁）。現在のIJF規約では「柔道は嘉納治五郎師範によって1882年に創始された」ものとしている（International Judo Federation, IJF Statutes）。
83）「講道館柔道十段物語　第13回『欧州柔道発展に貢献』安部一郎」『柔道』2012年4月号、16頁。

84）*Judo*, Février 1950, No.2, p.7.
85）*Judo*, Novembre 1951,No.19, pp.3-5.
86）田代重徳「国際柔道界の話題から」『柔道』1955年4月号、12頁。
87）*Judo*, 1954, No.41, p.32.
88）田代重徳「世界柔道選手権大会の準備進む」『柔道』1955年11月号、22頁。
89）田代重徳「世界柔道選手権大会の開催へ」『柔道』1955年9月号、3頁。
90）田代重徳「世界柔道選手権大会の準備進む」『柔道』1955年11月号、22頁。
松本芳三「世界柔道の花開く」『中等教育資料』文部省教育課程課、5(7) 1956年7月、p.6.
91）嘉納履正「世界柔道選手権大会の準備すすむ」『柔道』1956年2月号、1頁。
92）Gunji Koizumi, « Judo et Jeux Olimpique », *Judo International*, 1948, pp.161-162.
93）Niehaus, *op.cit.*, p.1176.
94）*Judo,* Septembre 1951, No.17, p.32.
95）*Judo International*, 1950, p.222.
96）『朝日新聞』1953年3月8日朝刊、1頁。
97）田代重徳「ボネモリ博士を迎へて」『柔道』1953年7月号、24-25頁。
98）Niehaus, *op.cit.*, p.1175
99）田代重徳「世界の柔道と国際柔道連盟」三船久蔵・工藤一三・松本芳三共編『柔道講座第１巻』白水社、1955年、160-161頁。
100）Niehaus, *op.cit.*, p.1176.
「『柔道のオリンピック参加』を東体協会長に聞く」『柔道』1954年7月号、3-4頁。
101）『朝日新聞』1955年6月19日朝刊、9頁。
102）*Judo*, Mai-Juin 1955, No.49., p.7. *Judo*, Mai 1956, No.55, pp.4-5.
103）*Judo*, Mai 1956, No.55, p.5.
104）*Ibid.*, pp.4-5., pp8-9.
105）Julhe et Clément, *op.cit.*, p.161.

（2017年６月７日受付
2017年10月２日受理）